

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教 育 学 ）	氏名	王 校 偉
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>シャドーイング単独・複合練習が中級日本語学習者の発話スキルに及ぼす効果 －作動記憶容量との関連性において－</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 松 見 法 男</p> <p>審査委員 教 授 中 條 和 光</p> <p>審査委員 教 授 間 瀬 茂 夫</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、同時通訳者養成のための基礎練習であるシャドーイングを取り上げ、中国語を母語とする中級の日本語学習者（以下、中級学習者）を対象として、シャドーイングの単独練習および複合練習が日本語の発話スキルの各側面（流暢性、正確性、複雑性）を向上させる効果があるか否かについて検討することを目的とした。実験に際しては、中級学習者の作動記憶（working memory：以下、WM）容量の大小を設定し、認知能力の個人差との関連性を調べた。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章では、第二言語学習者の発話スキルの向上に、シャドーイング、リピーティング、音読のような口頭再生を繰り返し行う練習法が有効であることを論じた上で、先行研究を概観した。発話の認知過程モデル（Levelt, 1989）に基づき、シャドーイングが発話の言語化処理を促進し、流暢性のみならず正確性や複雑性をも向上させる可能性があることを述べた。学習者のWM容量が発話の認知過程やシャドーイングの遂行にかかわることを示唆した先行研究を吟味し、シャドーイングの単独・複合練習が発話スキルの向上に及ぼす効果を検討する際の、WM容量の個人差を扱うことの重要性を指摘した。</p> <p>第2章では、4つの実験内容について述べた。実験1では、シャドーイングが発話スキルの向上に与える効果が、リピーティングと比べてどのように異なるかを検討した。その結果、シャドーイングがWM容量の大きい学習者の流暢性を伸ばす効果があることがわかった。シャドーイングとリピーティングは、発話の正確性を同程度に向上させる効果があることも明らかとなった。</p> <p>実験2と実験3では、シャドーイングの複合練習の効果を、同じ時間だけシャドーイングを繰り返す単独練習と比較した。実験2では、シャドーイングを4回行かせた後にリピーティングを1回行わせる複合練習Iを用いた。その結果、WM容量の大小にかかわらず、シャドーイング単独練習が複合練習Iよりも、流暢性と正確性を向上させる効果があることが明らかとなった。実験3では、シャドーイングを2回行かせた後にリピーティングを2回行わせる複合練習IIを用いた。その結果、複合練習IIでは、WM容量の小さい学習者における正確性の伸びが、WM容量の大きい学習者よりも大きいことがわかった。</p>			

実験 4 では、音読を 2 回行わせた後にシャドーイングを 4 回行わせる複合練習Ⅲを、シャドーイングの単独練習と比較した。その結果、WM 容量の大きい学習者では、シャドーイング単独練習のほうが複合練習Ⅲよりも発話スキルの流暢性を伸ばすことがわかった。ただし、音読を先行課題とした複合練習Ⅲでは、学習者の WM 容量の大小にかかわらず、シャドーイング文章の意味理解が促進されることが示された。

第 3 章では、4 つの実験について総合考察を行った。一連の実験結果を総括し、発話スキルの流暢性、正確性、複雑性の各側面について、シャドーイングの単独練習、複合練習の効果の出方をまとめて考察し、本研究の教育的示唆と発展課題を述べた。4 つの実験を通して、シャドーイングの単独練習、複合練習が発話スキルの各側面に及ぼす効果は、学習者の WM 容量の大小によって異なることが明らかとなった。WM 容量の小さい学習者の場合、シャドーイングの単独練習だけで文の音韻処理と意味処理の並行性を高めることは難しく、音読を先行課題とするシャドーイングの複合練習によって、意味処理が容易となり、発話の言語化処理が促進される可能性が高い。

本論文は、次の 3 点で高く評価できる。

1. これまで未解明であった中級学習者の発話スキルの向上に及ぼすシャドーイングの効果、複数の実験によって体系的に検討した点である。日本語の発話スキルが、シャドーイングの単独・複合練習によって向上する可能性を、学習者の WM 容量との関連性において調べた実証的研究は、管見の限り見当たらない。本研究の結果、シャドーイングが発話スキルの流暢性、正確性、複雑性の向上に及ぼす効果は、WM 容量の大小によって異なることが明らかとなった。WM 容量が大きい学習者の流暢性は、シャドーイングの単独練習で最も伸びることがわかった。
2. Levelt (1989) による発話の認知過程モデルに沿って、中級学習者の発話スキルの向上におけるシャドーイングの効果を説明した点である。発話の認知過程では、概念化処理における処理資源の配分や言語化処理における情報の一時的保持に WM がかわる可能性が高い (Levelt, 1989)。本研究では、WM 容量の小さい学習者におけるシャドーイング複合練習の効果が、シャドーイング後のリピーティングやシャドーイング前の音読における意味処理の促進に起因し、発話時における言語化処理の自動性の高まりによって生じたと解釈できる。
3. 第二言語としての日本語の教育現場に有益な示唆を導出した点である。教師は、学習者の発話スキルを伸ばすための方法として、リピーティングや音読を採用し、会話などの文章を大量に記憶させることが多い。しかし、本研究の結果から、発話スキルの向上には、特に発話スキルの流暢性と正確性を高めるためには、多くの言語知識を記憶させることよりも、即時的反応が要求されるシャドーイングのような口頭練習を繰り返し導入することが重要であるといえる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 2 年 7 月 31 日